

「奈良大学情報処理センター」第10号発刊に寄せて

奈良大学長 水野正好

1988年春4月、奈良大学は開学以来の華やかな雰囲気にも包まれた。宝来の地にあった学舎を、山陵の地に全面新築移転、文学部単科の大学が社会学部、教養部を新設、清新の気あふれる大学に化身したのである。この時点、宝来の旧校舎はなく、新しく構想され、建築された施設が「情報処理センター」であった。新築なった校舎の中でも、希望と未来の輝きを象徴する美しい建物であり、そのゆったりした空間、設置された情報機器は、将来を見せる存在として私たちの目を瞠らせるものがあった。

新しい教育、将来の社会の情報化を見通しての教育・研究がここに始まるとの想いが、やがてその活動の中で実態となり、奈良大学の中で定着していくようになった。教室はやがて総合研究棟にまで拡がり、多くの学生がこの情報処理センターに学び、出入りし、利用するようになった。阪神淡路大震災の際は本学情報処理センターの大型機器が大活躍、地理学科碓井先生と多くの学生、センター教職員の援助で大きな社会貢献を果たすことが出来、周囲の注目をあび、感謝された。教員一人一人、学生の個々の研究でもセンターの利用は恒常化、本年度からの情報教育必修化のカリキュラムも着々と進展し、大学の設置施設として一層その効を發揮しつつある。

情報処理センターでは平成2年より、センターの活動を、また利用した研究成果を公表する企画を樹て、『奈良大学情報処理センター年報』の発刊を始めた。順調に年次を遂い刊行、本年度で第10号を刊行することとなった。澁みなく着々と歩み行く姿は本誌をひもとくことで読み取れ、研究にとっても教育にとっても如何に情報が重要であり、センターが活用されているかが理解していただけるデータとなっている。学生の情報教育の必修化は恐らく一層のセンターの重要性、新しい側面を開拓することとなり、将来その利用を基礎に奈良大学に新しい「学」が誕生してくるものと思われる。施設の一層の充実とセンター教職員の一層の活動によって、この年報が年々充実し、20号、30号と続くよう願うものである。機会あるたびに補助、援助下さる文部省大学局をはじめ関係者のご厚意にも感謝し、未来に向けての大前進、大発展をとげたいとの想ひ切なるものがある。